

「カリキュラム改革のキーワード」

シラバス (Syllabus)

シラバスとは何か。今日の大学改革における教授活動改善の試みを象徴する用語である。講義科目名と概要からなる従来のタイプは、学生の覆修を積極的なものにするには不足があるとの反省が生まれ、様々な模索がなされつつある。単に講義日明記の講義内容一覧を指したり、それに加えて講義資料の一切を含むものをいったりと幅広く、草創期にある。従って、一方の無関心もあり合意される定義を生むまでに致っていない。このため、我が国では、「覆修要項」「講義要項」などと訳されてきたが、今日では、シラバスとそのまま記すのが妥当な状況にある。

刈谷剛彦は、『アメリカの大学・ニッポンの大学』（玉川大学出版部、一九九二年刊）のなかで、アメリカの大学でのシラバスを紹介している。これによると、シラバスは、文書として四つの性格―①事務的連絡、②法的契約、③学術情報、④学習指導―を持ち、六つの情報―①授業に関する、②担当講師に関する、③講義目的、スケジュール、④成績評価の方法、⑤文献の入手方法、⑥覆修条件―を含むという。また、外部からの大学評価の重要な情報源であり、学生の授業評価のもととなる。

では、これを日本の大学で実施しようとすると、どんな問題にぶつかるのか。刈谷は、帰国後東大での講義にシラバスを作成できなかつたという。理由は、通年制の講義では不確定要素が多いこと、一週間の覆修授業の種類が多く（アメリカ三―四科目、日本十科目）、学生の予習困難があるからだという。これは、大学教師誰しも直面する問題である。つまり、

シラバスの背景には、我が国大学の内部構造（TA、時間割、図書館、学年・学期制など検討課題）と大学を支える社会的組織のあり方（例えば、学会での教育実践情報の流通の不備）がある。これらの日本の新しい大学教育を可能とするシステムを創り出せた時、シラバスは、単なる授業紹介書ではなく、大学における教師と学生の学問研究、教授・学習の関係を表現し、その創造に働く触媒の役割を果たすことが可能になろう。

（田子 健・名城大学）